

# 小学校・幼稚園教員養成のためのピアノ指導法(1)

竹 内 アンナ

Guidance for Piano Lesson Methodology for Students  
in Elementary and Kindergarten Education Courses

Anna TAKEUCHI

教育現場で子供と係わるとき、音楽の楽しさを教えるためには、ピアノを使って授業展開できることが必要とされる。教員養成課程において、学生のピアノ学習経験にはかなりの個人差が見られ、初歩の段階から誤った解釈で演奏する者が多い。見落とされているいくつかの問題点とその取組み方を、これまでの学生指導の結果と併せて考察する。

## 1. はじめに

幼児期は、心身の発達の基礎を築く人間形成の大切な時期である。とりわけ、音に対する感覚は3歳から10歳頃までが最も著しいと言われる。幼児・児童の音楽教育における役割は、一人ひとりの個性をできる限り早い時期に引き出してあげることであり、教材選びにおいても、子供たちの発達段階に応じた無理のない選択を心がけることが大切である。

教育現場で実際に子供と係わるとき、音楽の楽しさを身近で感じてもらう、その担い手となる楽器がピアノではないだろうか。教員を志す者は、責任ある指導を行なうためには、先ずピアノの基礎を充分習得することが必要である。ここではこれまで学生にピアノの指導を行ってきた過程におけるいくつかの問題点の考察と併せて、教育現場に即した演奏技術を身に付けるための学習方法を述べる。

## 2. 姿勢と手のかたち

### ・椅子の高さと腰かけ方

ピアノ学習者が演奏する前に心得てほしいことは、ピアノが弾きやすい姿勢をととのえることである。それは何を意味するかというと、座る椅子の位置と高さである。

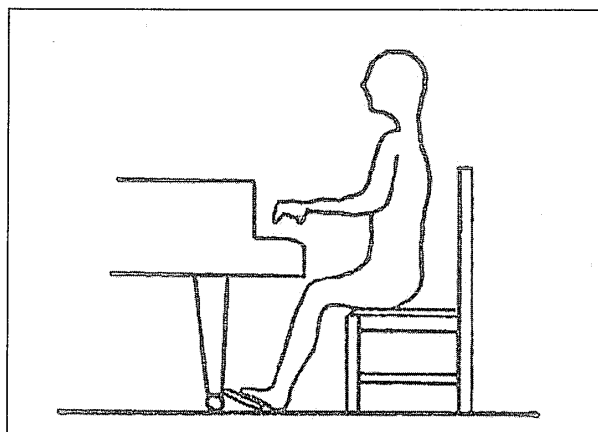
ピアノの椅子は、鍵盤の中央の所にまっすぐに置き、身体は、椅子の座面前半分ぐらいの所に坐骨を乗せるような感じで座るとよい。

次に、椅子の高さは、手首を鍵盤の上に置いたときに、腕から手の甲まで、即ち(図1)のように肘関節から手首関節、そして指の第1関節までが鍵盤とほぼ水平となるように調整を

する必要がある。

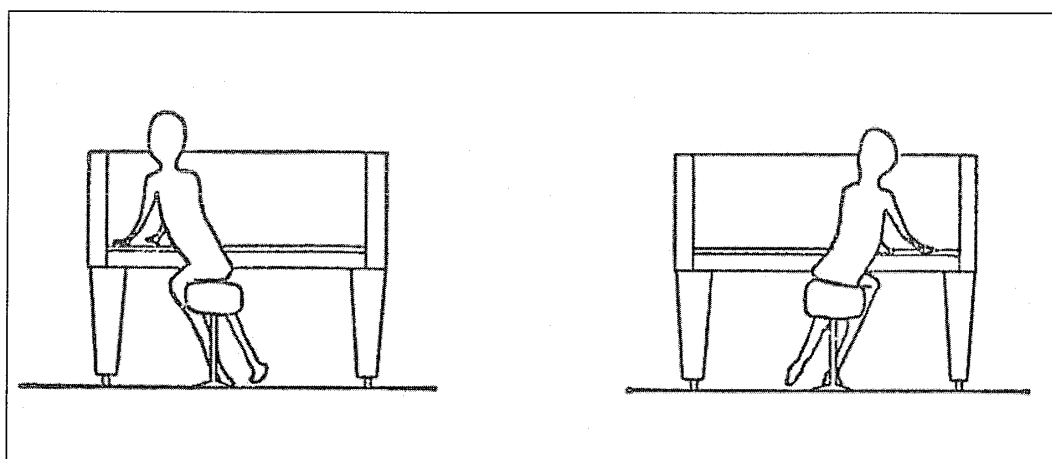
その時、ピアノと身体との距離は、両手が鍵盤の上を無理なく自由に動かせること、また交叉して弾く場合には、腕が窮屈にならないように弾きやすい姿勢が充分とれることが大切である。そのためには鍵盤の下に膝が少し隠れるくらいの間隔を作ると丁度よい。

(図 1)



最後に付け加えておきたいことは、椅子に座ったときの脚の位置である。両足をペダルの下に突っ込んでいる人、膝をぴったりくっ付けている人、足の先をハの字にしている人など悪い姿勢の人が多。教師はこの点を見落としやすいので十分に注意する必要がある。正しい脚の位置は、肩幅よりやや広めに床に置くと、両手が高音または低音と左右に幅広く移動しても、身体が(図 2)のように傾くことがなく、より安定した姿勢が取れる。

(図 2)



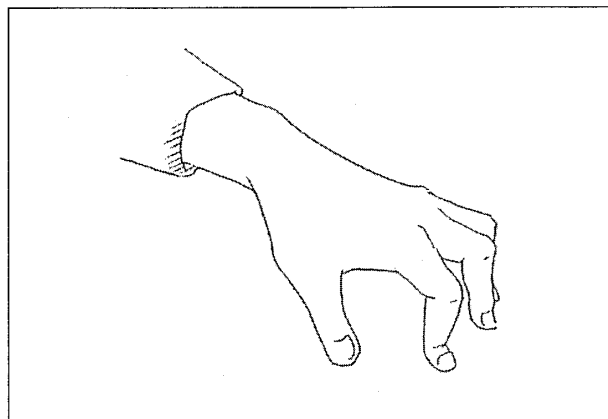
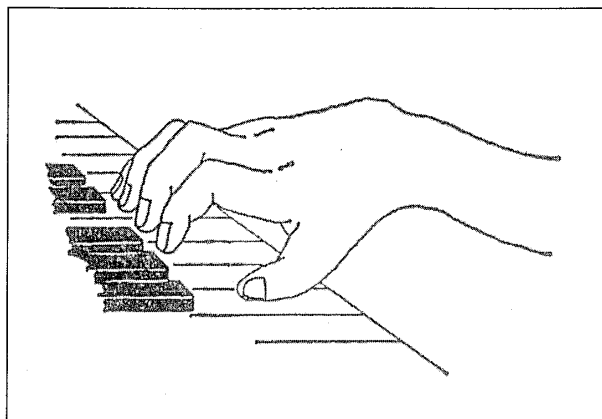
#### ・ピアノが弾きやすい手指のかたち

演奏する準備が整ったら次は実際にピアノの音を出すことを取り上げる。はじめに、多くの学生の指導をおこなってきた中で最も多く見られた問題点を二つあげることとする。

一つ目は、（図３）・（図４）に見られる関節のへこみである

（図３）

（図４）

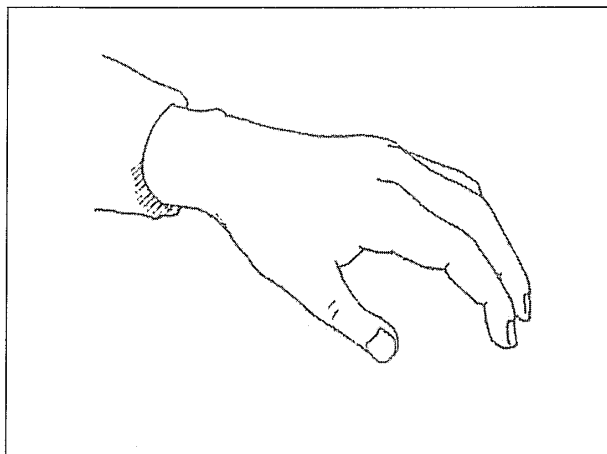


打鍵した瞬間に（図３）では第１関節がへこみ、それと同時に手首が下がってしまうのは、無理な力が第３関節から先の指先に加わるからである。（図４）では、第３関節がへこみ、手首はやや上がりぎみである。これは指が弱く指先にかかる力を支えることができないためである。このどちらの指のかたちも演奏する上で運指に支障をきたし、また音色やテンポによる表現も損なわれる。

初歩の段階での指のかたちは、肩から腕そして手首まで力を抜いた状態で鍵盤に手首を置き、指をゴルフボールを軽く握る感じに曲げる。丸みのある形のまま指を鍵盤に下ろし、鍵盤が止まったとき、小指が右側（右手の場合）、或いは左側（左手の場合）に傾くことがないように甲を平らに保つことである。この小指の傾きは多くの学生によく見られるので、この点も教師は充分気をつけて指導してもらいたい。ここまでのことが自然に行えるようになると、安定した指の動きが得られると同時に音の流れもスムーズとなり、また見た目にも演奏する姿がきれいである。（図５）・（写真１）はその模範例である。

（図５）

（写真１）

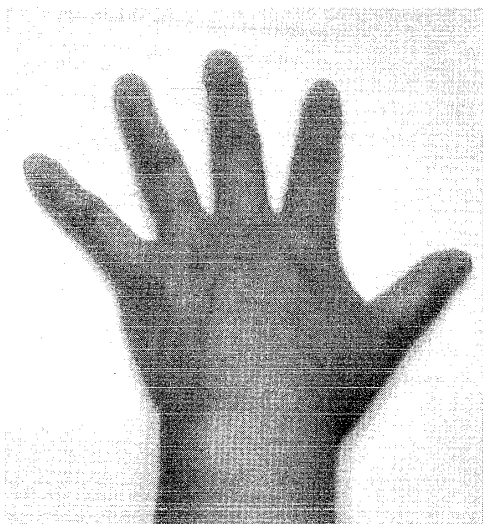


### 3. 教材からとらえた運指と表現

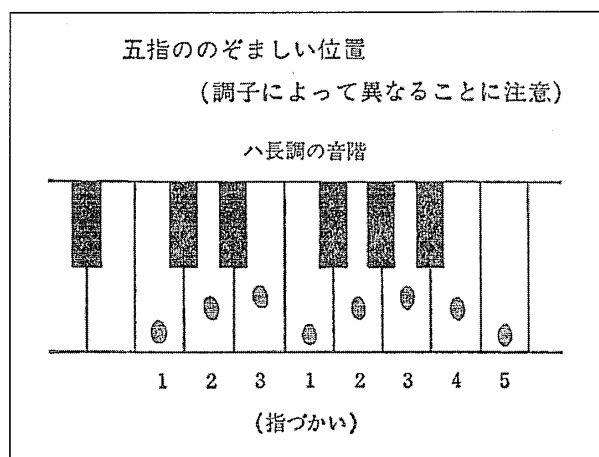
#### ・指と鍵盤の位置関係

ピアノを学ぶには単に音を出すのではなく、作品にふさわしい音色が求められる。人間は10本の指をもっているが、長さや太さ、そして指の強さは人それぞれである。指の特徴や癖によって多少の違いはあるにせよ、(写真2)に示すように親指から中指そして小指へとなだらかな半円を描くようなかたちをしている。そのまま指をかるく丸めるようにして鍵盤に置くと、(図6)のように指の位置もまた半円を描くようになる。学生の中には、鍵盤に触れる●印の位置が横一列に並んでしまうことがあるが、これは無理があり円滑な指の動きを妨げるだけなので、自然なかたちに直すことが必要である。

(写真2)



(図6)



#### ・無理な運指

次に、上記に記した鍵盤に置く指の位置を基本としながら、運指の違いによって演奏にどのような影響があるのかを教材から分析する。ピアノを弾くことにまだ慣れてない人は、殆どの場合が指使いまでを考慮に入れることができない。楽譜に記された音をなんとか弾いてしまいたい一心から、利き指（主に1・2・3の指）ばかりを使った無理な運指の扱いが見られる。

(譜例1)

### 春 の 小 川

♩ = 104  
C  
mf

1 は ー る の お が わ は さ ら さ ら い く よ  
2 は ー る の お が わ は さ ら さ ら い く よ

F C

文 部 省 唱 歌  
高 野 辰 之 作 詞  
岡 野 貞 一 作 曲

（譜例１）３小節目から４小節目のEからCに移るとき、１－１を使うケースがよく見られるが、これは音が切れてしまって音楽の流れを損なう。なぜ、この指使いになってしまうのか、それは４の指が弱く苦手なため常に避けてしまうからである。３・４小節に渡る７つの音の指使いを、４－４－３－２－１－２－３の順に演奏したならば、音楽の流れと指の動きのどちらもスムーズになる。

次に（譜例）２では、３小節目から４小節目のHからAに移るとき１－２を使うケースが多いが、短い付点のリズムで、しかも次に高い音に跳躍しているため、不安定になるので３小節目からの６つの音は、１－３－４－３－２－１としてAを１にすると安定した音と跳躍が得られる。

（譜例２）

### 雨ふりくまの子

鶴見正夫 作詞  
湯山 昭 作曲

♩ = 108 やさしく話しかけるように

（譜例３）では、前奏の４小節目、左手AからAisに移るとき２－３を使う学生が大変に多い。これは、中指が人差し指の上を覆い動きが妨げられるので弾きにくい。演奏上指を覆うかたちの運指は、親指を使った音の次に他の指が親指を覆うように扱うことはあるが、２・３・４の指の間でのこのような扱いは非常に無理があるので行ってはならない。この場合、前打音GisとAを２－１とし、Ais－H－Cis－Dは４－３－２－１で扱うと、スタッカートによる歯切れの良い軽快な音を得られる。

（譜例３）

### 犬のおまわりさん

佐藤義美 作詞  
大中 恩 作曲

♩ = 104

運指について共通していることは、習熟が浅いため10本の指を上手に使い分けることがでず、弱い指を避けて自分にとって都合の良い指を優先しているために、音楽の流れが損なわれてしまうことである。(譜例4)も同様に、3小節目のGからFisに移るとき、2-3と弾いてしまう学生を良く見かけるが、これも(譜例3)と理屈は同じことで、このような弾き方をしてはならない。

(譜例4)

## 大きな古時計

保富康午 作詞  
ワーク 作曲

♩ = 108

1 おー おきな のっ ぼの ふると けい おじ い さん の と け い  
ひゃく ねん いつも うご いー て いた ごじ ま ん の と け い さ  
2 なー ん でも しっ て る ふると けい おじ い さん の と け い  
きれ い な は な よめ や っ て き た そ の ひ も う ご い て た

上記の2つの例からわかることは、ピアノの学習経験が少ない学生は、初歩の段階においては4の指を極端に避けてしまう傾向にあるということである。運指の設定は難しい問題であるが、たくさんの練習曲をこなし、いろいろな指の動きに慣れることによって、少しずつ合理的な指使いで演奏することができるようになる。また、教師も無理な運指で学習している学生には、できるだけ効率の良い、しかも曲の流れを損なわない指使いを指導することが大切である。

### 4. ピアノ学習について

#### ・譜面を正確に読み取ること

曲を弾くことの前提にまず、演奏者は忠実な心をもって譜面に向かい、表されていることを正確に読み取る意識を持つことが大切である。ピアノの学習を始めた段階では、技術的に余裕がないので音を拾うことばかりに意識が集中し、その他については何も注意していない演奏者が多い。譜面を読み取ることとは、譜面の中に記されていることを正確に守り、そこから作曲者の意図することを自分なりの解釈と感覚で創造し表現することである。では、どういうことに注意してピアノ演奏の準備をしたらよいのか、そのための守らなければならない基本的なことをここに挙げる。

☐ 音符と休符の長さは正しく取れているか。

☐ ト音記号とヘ音記号による鍵盤における位置関係は間違っていないか。

☐ 指使いを譜面通りに扱い弾いているか。

- ☐ 臨時記号を正しく理解しているか。
- ☐ リズムを正確に刻んでいるか。
- ☐ スラーがどこにかかっているか、どこで終わっているのか。
- ☐ 何調で何拍子の曲なのか。

上記のことを正しく守って演奏できる学生は皆無であるが、これは本人が未熟という理由からではなく、音符以外への意識が薄く自分勝手な先入観で演奏しているためである。学習する中でこれらのことが正しく行なわれているかどうかは、本人のみならず教師の鋭い観察眼と指導力に依るところが大きいのである。

#### ・練習と精神力

ピアノの学習に限らず何かを成し遂げるとき、自らが努力してやり抜こうとする粘り強い精神力を持たなければ、目的は達成し得ないのである。指導においては、先ずピアノの学習過程が異なる環境にある学生達の意欲が削がれることのないように、教材選びと指導方法に十分配慮することが重要であり、その上で学習目的をはっきり認識させることで、自発的に取り組む意識が生まれるのである。

では次に、実際にピアノの演奏についてはどうかというと、初めのうちは unnecessary な動作や力が指に加わり鈍い動きをしたり、音符の読み違いによる音のミスなど、誤った演奏をしていることが多い。ピアノ学習とは、楽譜に記されていることを認知し、それを理解して筋肉運動に反応させる繰り返しである。粘り強くこの練習を繰り返すことにより、譜読みも早くなり指の動きにも迷いがなくなる。但し、学習を始めてしばらくすると、一時期進歩が停滞し壁に突き当たる。しかし、諦めずに根気強く練習を積み重ねていると、初めのころに感じられた緊張や体の無理な力が次第に抜けて、曲全体に滑らかさが出てくる。これこそが練習効果というものであり、粘り強い精神力がそこに培われるのである。この壁を打ち破ることで学生にさらなる自信と気力が湧き、学習態度も積極的になり意欲的に取り組む姿勢が顕著となる。

#### 5. おわりに

教員養成課程においては、学生のピアノ学習の経験度は個々に異なるので、教師は教材選びと指導について充分配慮し行わなければならない。学生が目的を持ってピアノ学習を始めるとき、はじめの段階において最も大切なことは基本をしっかり学ぶことである。誤った解釈のまま学習を続けると、悪い習慣が深くしみ込み、正しい演奏になるまでにかなりの時間が必要となる。第一に、ピアノ演奏の基本動作である椅子に座るときの正しい姿勢を身に付けることが大切であるが、案外見過ごされているように思われる。姿勢は後々の演奏にどこまでも影響することであり、また教師の演奏姿勢が綺麗であることも指導者として大切な要

素である。第二に譜読みについては、間違った解釈をしていないか教師は常に細かい注意を払い、誤りがあった箇所についてはことばで具体的に説明を行うか、模範演奏を示し理解できるように配慮することが大切である。そして最後になによりも大切なことは、ピアノの学習とは、目標に向かって粘り強い精神力で努力を積み重ね、自分自身が最後まで諦めずにピアノに向かい練習することである。

#### 引用・参考文献

- ・ 大野桂 (1977)『子供の心理とピアノの指導法』 音楽の友社 p.50.51.55.59.67
- ・ 雁部一浩 (1999)『ピアノの知識と演奏』 音楽の友社 p.55
- ・ クラウディオ・ソアレス (1996)『演奏と指導のハンドブック』 ヤマハ p.127
- ・ 森山ゆり子 森山光子共著 (2000)『ピアノ演奏の秘訣』 音楽の友社
- ・ 井上直幸 (1998)『ピアノ奏法』 春秋社
- ・ 森田百合子他 (2000)『幼児の音楽教育』 教育芸術社